

はしがき

本論集は 21 世紀 COE 研究「プラトンとロシア」参加者による 3 冊目の刊行物となります。2006 年 9 月 23 日に、北海道大学スラブ研究センターにおいて行われた研究発表会における発表とディスカッションをもとに執筆された論文 2 本と、研究会発表なしに書かれた論文 3 本を収録しています。なお各論文は助言者に読まれて助言がなされた上で、再執筆するという形が採られており、その際には今回は執筆者としては参加しなかった大須賀史和（横浜国立大学教育人間科学部）、北見諭（神戸市外国語大学外国語学部）、杉浦秀一（北海道大学大学院メディア・コミュニケーション研究院）の三名が助言者として参加しています。

第 2 集に引き続いて第 3 集も研究対象の時代順に論文を配置しました。

ロシアにおけるプラトン受容の最初のピークは聖職者と貴族により形作られたことは、既に前回の報告集で明らかになっていますが、今回の兎内論文では聖職者による受容の根源が探求されています。その前史の叙述からは、意外なまでにギリシャ語を解する人々の層が少ないことに驚かれる方も多いでしょう。1814 年の宗教学校規則においてプラトンの名が登場することも意外な印象を持たれるでしょう。そして下里論文はその後の状況、とくにプラトン哲学にロシア正教がどのように関係づけられたのかを解明しています。ここで採り上げられている思想家の一人ヴァシリイ・カールポフは、この最初のピークの象徴とも言うべきプラトン著作集の翻訳者であり、この人物のプラトン論は興味深いものがあります。

プラトン受容の次のピークはウラジーミル・ソロヴィヨフらによって形作られるのですが、二つのピークの間中期および第二のピークの準備期として考えられる時期に活躍したのがスラヴ主義者達とパムフィル・ユルケーヴィチになります。坂庭論文はスラヴ主義者の一人イヴァン・キレーエフスキーを論じています。キレーエフスキーは愛智会のメンバーであるという点では最初のピークに絡んでいます。しかも彼はシェリングに大きな影響を受けていました。シェリングの思想がプラトンに多くを負っていることから、ロシアにおいてのプラトン受容とシェリング受容の区別は難しく、キレーエフスキーは重要ではあるもののなかなか論じにくい対象です。坂庭論文ではこれらが整理され、最終的には信仰の問題へと収斂されていきます。

根村論文と貝澤論文はソロヴィヨフに始まる第二のピークを扱っています。とくにウラジーミル・エルンは、プラトンに多くを負っていることを高らかに宣言している思想家であり、ロシア・プラトニズムを研究する際に極めて重要な思想家となります。

まだまだ多くの問題点が残っていることは、認めねばならないでしょう。ユルケーヴィ

チについては、『アイデア』は第2集の下里論文で分析されましたが、肝心の『プラトンの学説における理性とカントの学説における経験』を扱った論文を掲載できませんでした。余談になりますが奇しくも今年度、東京外国語大学において博士論文として宇都弥生氏の『近代ロシアにおける二人の信仰者、G.S. スコヴォロダーおよびP.D. ユルケーヴィチ研究——ロシア哲学史の再構築のために』が受理されており、ここにおいて上記論文の分析が行われていることを指摘しておきましょう。またソロヴィヨフの生涯最後の時期のプラトン受容についてはまだ多くの問題が残されていますし、アレクサンドル・アブラーモフがロシア・プラトニズムの重要な思想家としてパーヴェル・フロレンスキイと並べているセミョーン・フランクについても論文を掲載できませんでした。

以上のように最後の論文集においても、結論的なことがまだ提示できないばかりか、やっとなり不足している部分が少し見えてきたというのが実情です。逆に言うと我々がこのプロジェクトを開始した時点では、問題の大きさを十分把握していなかったということになるでしょう。

ロシア文化は常に西欧文化の影響にさらされつつ、これを積極的に摂取したり反発したりしながら、自己のアイデンティティを模索してきました。こうした中でプラトンという作家・哲学者は、西欧文化の根源でありながらも、ロシア文化はこれを西欧文化とは別の形で受け止めているという意識を持つことが出来る不思議な位置にありました。この意識が歴史的に事実に基づいているかどうかは別にしても、こうした意識に基づいてロシア文化のかなり重要な部分が構築されてきたことは事実であり、この意識のあり方をきちんと分析することがロシア文化史にとって極めて重要であることは確かであると思われまじ、この研究は何らかの形で継続されねばならないというのが、我々の現在の結論です。

なおスラブ研究センターCOE支援室の細野弥恵氏、岡田由香利氏にはお世話になりました。お礼申し上げます。

編集担当者：根村 亮